
ギルティア戦記

朱鳥 皇星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギルティア戦記

【Nコード】

N0702R

【作者名】

朱鳥 皇星

【あらすじ】

・*:.。これは異世界に呼ばれてしまったとある少年少女たちの戦いの物語 . . .。 . . . * .

世間体を気にして当たり障りのないことしか言わない大人たちや世間にうんざりしている龍騎、佳祐、蓮とその仲間たち。見覚えのある日々に、態度には出さないがうんざりしていた彼らは突如、謎の力に導かれ、異世界に行きつく。

「……どこ、ココ？俺達は一体どうやって生きていけばいいの？アアアアアアアアアアア！……！」

「ちょっと落ち着け。」「」で騒いでもどつにもならん
冒険は、突然始まった。

プレリユード〜前奏曲〜（前書き）

初めまして。拙い文ですが、読んでいただけたら嬉しいです。

プレリユード〜前奏曲〜

これから厳しい冬がやってこようとしている霜月。晩秋の気配漂う外の風景と同期したように昼休みの三年六組は静寂に包まれていた。それもこれも全部これからやって来るであろう受験戦争に勝ち残るため、というのは受験生達の弁。

時は2010年、ここ千葉県誘市立誘中学校の三年廊下は一部の廊下以外は十月くらいから閑散としている。

そう、一部の廊下以外は。その唯一の例外的な廊下はまさにここ、三年六組の前にある、一番西側の廊下だ。

西日が当たって温かく、校舎の一番端に位置するこの場所は、不良供御用達の場所と相場がきまっているものだ。

事実、三年前までは此処は不良の溜まり場でそれはひどいありさまだった。壁に下品な落書き（内容は割愛させていただく）があるわ、返り血の跡がたつくさんについてるわetc……だが、そんな不埒な輩は最早この学校に存在しない。

なぜなら、現在のこの場所は今のこの場所の、（というよりは実質学校全体の）支配者によって駆逐されているからだ。

そして今、そんな元不良御用達——現在は「万」と書かれた文字が張つてあるドアの前に立っている赤みがかった髪をうつとおしそうにかきあげる男がいた。人に好かれる柔和でいてどこか絶対的な強さを感じさせる印象深い瞳がすうっと細められる。彼の名は、草馬

マ・タツキ
龍騎。

龍騎の手によって勢いよく開かれたドア、そしてその先にあったその廊下には、この受験シーズンに余裕ぶっこいてふかふかカーペットの上に置いてあるソファで寝ている大馬鹿野郎がいた。

いや、頭はいいが、ム力つくやろう。ちなみに、ここにソファがある（ついでに言えばかつてに工事を依頼し、壁とドアを設けている。最早廊下じゃない）事に対してはスルーしてもらいたい。万屋

委員（なんだそりゃ？）の依頼受付場所だから。

「何でお前はそこに寝ているんだよ、乱。そこは俺の指定席だ」

と目の前の茶髪ワイルドウルフ、優しげな光をたたえた瞳のその男

——オオクマ・ラン大熊 乱に言う。

龍騎と呼ばれた大柄というよりはもう、巨大といった方がふさわしい男、乱はゆっくりと目を開け、

「あ、龍騎。なんだ、もう来ちまったのか。チッ！」

と言い捨てた。勝手に人の席を奪っておいてこんな言い方をする奴もそうそういないだろう。

「何舌打ちしてんだよ手前このヤロー」

そついうと、打って変わって、冗談だよ。と笑う。

あきれた目線を乱に送りつつ、ふと他のソファーを見れば、他には誰もいない。いつもなら速攻でいる連

中なのに珍しい事もあるものだ。と龍騎は思った。

「……知らないと思うけど、他の奴は？」

と一応尋ねてみると、なぜか得意げに乱はこちらを見て話す。

「へへん！残念でした！みんなの行動はきちんと把握してますよん」
「まず淳哉は二組でお勉強を教えて、佳祐は野球部の後輩に練習方法のレクチャー、巧はサッカー部の後輩にやっぱりレクチャー、昌士は六組にいる、女子連中はマッ。に飯の買い出しだよ。あ、そうそう悟はトイレだ」

乱の言葉で全員の居場所が解ったかに思えたが、ただ1人だけ足りない。

「……蓮は？」

「ああ、あいつはいつも通り行方不明だよ。ま、きっと校庭のどこかにいるんだろ」

「……だろうな。つーか何でお前はそんなに他人の行動に詳しいわけ？」

と乱に事情を訪ねると、ドヤ顔でなめた言葉を返してきた。

「イヤ、俺が一番早くに此处に来て、みんな俺に伝言して言ったんだよね」

「……で、授業は？」

「出てないっ！！」

受験生に殺されてしまえ。そう思ったのは今日で何回目だろうか。

「と、噂をすれば淳哉降臨だ」

乱が龍騎の背後を指し示す。振り返るとあちこちに髪がびよんびよん跳ねてる男がいる。

背は170前後、乱や佳祐をワイルドなイケメンと例えるなら、こいつは生徒会長が似合うさわやかなイケメンといった感じだ。

そんな神代「コウジロ・シユンヤ」淳哉。という顔はそこそこののにテンパがちよつと残

念な、メガネ

が無駄に似合う幼馴染みに向けて、龍騎は声をかける。

「相変わらずぴょんぴょん跳ねてんな。イケメンで秀才な先生さんはさ」

こいつを説明するならこの一言で事足りる。しかし、本人はイケメンと呼ばれるのも秀才といわれるのも先生といわれるのも大嫌いだ。

「……僕は君の幼馴染みであって、先生ではないし僕はかつこよくない。髪は天然パーマ。それにその呼び方は止めると前も言ったよね?」

「ワリい。お前の顔見るとつい言いたくなっちまうんだ」

そういうと淳哉から現実的痛みを引き起こすであろう一睨みを受ける。この視線というか目力は最早凶器だ。

「大体、自分だってツンツンショートアシメ止めてミディアムストリートでちよつとすっげー爽やか〜な髪形に変えてからはさらに女子からキヤーンッって注目浴びてるって話だけど?」

痛烈な反撃を食らってぐうの音も出ない龍騎に淳哉は満足したようだった。

「口では一生淳哉にかなわん。そんなことくらい判ってるだろう?」

ポン、と肩に手を置いて乱が言った。

そしてただでさえ攻撃を食らって落ち込み気味の龍騎に六組から出て来た青みがかかったギャル男へアー

で静かな光を携えた目の男がさらに追い打ちをかける。

「龍騎の方がラブレターの数多いよ。淳哉は通算十五通、龍騎は通算で十七通」

彼は氷室ヒムロ・マサシ 昌士。あまり口数は多くない。しかも喋るときはたいてい皮肉だ。

昌士を何も知らない人は彼を人間嫌いとか根暗とかいうが、それは真実とは言えない。実は誰よりも物事に熱中しやすい昌士の事を嫌いなやつなど、知る限りではない。

昌士の友達は分かっているのだ。彼が本当は不器用で、本当は明るい奴だと。

「余計なこと言つなよ昌士」

「ホントの事」

……愛想はホントにないんだよな。いい加減皮肉以外の言葉も聞きたいぜ。と、思考を巡らせた瞬間、窓から（！）二人組が入ってきた。

見なくても解る。というか直視したくない。窓から入ってくる瞬間を。なんて言うか、自分の中の常識が崩れ落ちそうだから。いろんな意味で。こんな非常識きわまるやり方をする奴はもうあいつしかない。

そう考え、龍騎はあくまでそちらを見ないように注意した。まるで無意味な行為だとは知りつつも。

「ここ、3階だぞ？そこらへん判ってんの？お前ら二人」

龍騎の非難の感情が少なからず込められた一言に臆した風もなく、彼はにっこりと人好きのする笑みをたたえて答えた。

「いいやん、別に。階段登るの面倒やったんやから」

悪気ゼロ。まあ、判っていた事ではあるが。あるんだが……やはりがクリとせずにはいられない。
もう一人入って来た男は、彼のその表情をみて溜息をつき、ぶつぶつ何事か呟いている。

「俺は嫌だって言ったのにこいつが無理やり……」

奇想天外な登場をした二人の前者が^{ジバシリ・タクミ}巧、後者が^{イガラシ・ケイスケ}五十嵐 佳祐という名だ。

巧は引退するまではサッカー部主将で世界中学生サッカー大会で代表に選ばれる程の実力者。

マツトな質感でセミロングの茶髪、切れ長な怖い瞳に加え、何故かえせ関西弁を話す彼は少々（？）行動の常識に欠ける。そのくせ変に頭が切れるからまた扱いづらい。

彼の特筆すべき恐ろしさは、情報収集を使った陰湿にして巧妙、そして一切の私情をはさまない策謀にある。

教師陣に何かと煙たがられ、一部の教師からはあからさまな嫌がらせを受けることも少なくない俺たちの代わりに何かと教師の弱みに付け込んで活動に有利に動く、いわば支援組織のような行動。彼に目をつけられてその後、精神がまともでいられたものはごく少数だ。被害にあった人々は彼を畏怖を込めてこう呼んだ——人の皮をかぶった悪魔。それくらい裏で何を考えているのか分からない。

それに対し、佳祐は自分の友人の中では恐らく最も常識がある人物だ。

彼は野球の名門クラブチームに所属し、将来プロ入りは確実といわれる連中がごろごろいる中でやはり主将として活躍。

ホームランマシンの異名はだてじゃないとは試合を観戦しに行つた自分が幾度となく対戦相手チームの監督や相手側の主将から聞いた眩きだ。

ちなみに憎たらしい事に龍騎の知りうる限り最もかつこいい人物もまた、彼である。

こんな完璧な男がこの世にいていいのだろうか？彼の友達はず必ず経験する感情である。

ちなみに佳祐は巧とは対照的に、困っている人々を放っておけない性格だつたり。

例えそれが自分や仲間に対峙するものであつても、最終的にぼろぼろになつた相手を助けてしまう。

よくいえば慈愛に満ちた、悪く言えばお人好しな彼を崇拜するものは少なくはない。もちろん、偽善者と毛嫌いするものも存在するのだが。

「……お前ら、ホント好きだね。奇想天外な行動。僕はいつも驚かされるよ」

「淳哉！！お前ホントに俺が望んでこんな目にあつてるとでも！？
どんなけみんなに見られたのか、それがどれだけ恥ずかしかったか
……」

そこまで一気呵成に言い、なおも文句を垂れようとする佳祐の背後に怪しい影。

「わかつたからおちつけにゃー？」

「！？」

何故か猫言葉のそいつは佳祐のスラリとした肩を優しい手つきでそつと抱きしめ、耳元でささやく。そのあまりに突然な抱擁に佳祐は思わず震えてしまった。

「……彰人か」

げんなりした顔で昌士は呟いた。昌士も過去にあの攻撃に会って、以来耳元で声がすると反射的に震えてしまう。

今現在、流し眼を佳祐にくれている男の名は松田 マツダ・アキト 彰人。女に好かれ、男には羨望と嫉妬、そして局地的には愛される見た目を持つ。

ワックスできちゃんとセットされている鮮やかな黒髪はそれだけでとても蠱惑的に映る。欠点として誰にでもあのように後ろから奇襲を仕掛け、隙あらば喰い物にしようとする所だ。この攻撃を味わうと、一瞬妙な気分させられ、それで自己嫌悪に陥るという。

気障な言い回しは多いが、自分の容姿の良さをかさにきて人を見下したりはしないので基本は性格がいい。だがやはり、勘弁してほしいのは確かなのだった。自分の印象としては、食えない奴だ、ということだ。どうもあの性格の裏に何か隠している気がしてならないと長く考えにふけているとカオスな状態になりそうなので、とりあえず止めに入る。

「ほら、離れる彰人。佳祐がプツンしちまう前に」

「仕方ないなあ。もう少しこの引き締まった筋肉を味わっていたかったけど」

「……助けて、誰か。俺が喰われる前に」

心から懇願しているのはその場の全員に判っている。だが、全員の

思いは一つだ。

——骨は拾ってやる。行ってこい。てゆうか行って下さい。そうすれば誰も被害にあわずに済むからなのは言っまでもない。

「……ゴメン、ムリ」

昌士が呟き、彰人は舌なめずりを始める。貞操の危険を感じる佳祐に心からおめでとうと伝えよう。うん、それがいいよ。こんな状況のとっても情けない男たちに救いの手がやって来たのは、それから一分程のちのことだった。

プレリユード〜前奏曲〜？

「メシ買つて来たぞーって佳祐……お前、気の毒だなあ」

「たつだいまー！！……ってあれ？^{佳祐}けーくん、どうしたの〜？」

「はあ、疲れた。あれ、佳祐……まあいつか」

「お兄ちゃん、なんでそんなボロボロ！？」

精も根も尽き果てた佳祐を見た感想は十人十色である。

まず入って来たのが徳川^{トクガワニアカネ}茜。名前の通り、かつて日本を取り仕切るまでに繁栄を極めたあの徳川家の宗家の娘、つまり他に男児が生まれなければ次期当主にあたる。本来なら男児の養子を迎えるのだが、このままいけば初の女当主誕生となるだろう。

男っばい話し方で勝ち気な性格をし、さらに武士に必要な武芸一般をやらされ、常に人の役に立ち、上に立ち、慕われるように育てられた彼女は髪を染める事を許されず、真っ黒で、尾？骨辺りまで流れる美しい髪をなびかせている。

前述の当主の話に絡んでくるのだが、茜の父親の難点として、早くに亡くした母の面影がある茜を溺愛などというレベルではない愛し方をしている所が挙げられる。聞く所では淳哉は茜の幼馴染なので何度も彼女の家を訪ねているそうだが、そのたびに『私の娘に手を出してみろ……日本軍を貴様に差し向

けてやるからな。』と脅されている（彼女の父親は自衛隊の最高司令官）そうだ。これを五歳のころには既に言われているのだから、徹底していると思う。この調子ではきつと女でも当主に迎えてしまうというのは心理学者でなくてもわかるだろう。

「よージュン。相変わらず……」「いや、もうわかったから！それさつきも龍騎に言われたから……！」っ何だよ、つまんねえの。つーか明日お参りだよ。めんどくせーな……昌士、お前俺……アタシと変われ」

「それ、家康が聞いてたらさぞ怒っただろうね」

「つーかまだ女言葉喋れないの？」

「嫌だ」

徳川末裔に対する龍騎、乱、昌士の反応である。

二番目に入って来た椎名^{シイナ・ユウノ}悠乃はいつも一緒にいる龍騎達の中でもとびきり元気、言いかえれば天然な女。愛情豊かな育てられ方をしてきた悠乃は人を疑う事を知らず、自分たちはそのハチャメチャっぷりにいつも振りまわされている。人にすぐ渾名をつける癖があり、誰もかれもそのペースに振り回され、気がついたら笑顔になっているのだ。その笑顔に吸い寄せられ、また人が集まるので彼女の周りには常に十数人の人だかりができる。かくいう自分たちも彼女が結成のもとだったりしている。

「タツくん^{龍騎}、なんでけーくんぼろぼろなの？はっ！！もしや宇宙人の襲来！？きつと誤差二ミリ以内のことが真実のはず……」

「いや、違うからね。二ミリどころか百キロ位外れてるからね！」

「……どんな状況で宇宙人が来るんだよ」

「イヤ、乱は突っ込む所間違えてるから」

悠乃、龍騎、乱、茜の素人漫才ここに降臨。

その後、ふらりと入って来たのは龍騎の幼馴染、結白^{ユイシロ・リカ} 里香。何かとめんどくさがりで、もうどうしようもないくらい無気力で、あーあ、と言いたくなる。眠そうな常に半眼の瞳に気力がわく日は一体いつになるのだろうか。ちなみにこんな中でも一応勉強できたりするから、世も末だ。

ちなみに里香は言葉の外に本音が見え隠れすることが時々ある。だが、その本音に気付けるのはごく少数の身うちだけ。慣れたものは里香の望みをくみ取って何も言わずやってあげるのだが、他人は我がままな女と誤解しやすく、同性にも異性にも敵を作りやすい。もつとも、他人からの評価など本人は気にも留めていないのだろうが。

思考の先読み現象の例←

「ねえ、龍騎。(お茶淹れて)」

「うん、わかった」

コポコポコポ

「はい、出廻らしただけ」

「……(うん、ありがと)」

佳祐「……なんでわかんのか？」

彰人「世界七不思議だにゃー」

イガラシ・アヤ

最後が五十嵐 妖。苗字を見ればわかるが佳祐の妹。実に可愛らしい、男ならばだれでも保護欲が盛んに掻き立てられることは間違いないくらい低い背に、十四歳とは思えない程の幼い顔つきからでる殺人級なスーパーキュートスマイルがもうなんていうか、やばい。ちなみに妖は隠れブラコン。みんなの前ではなるべく隠しているが、実はお兄ちゃん大好き過ぎて、この年になってからも一緒に風

呂に入ろうと考えているらしい。佳祐は妹のその行為を全力で阻止しているが、同時に無下にすると妖が泣いてしまうので、水着着用を佳祐が風呂にいる間は義務づけている。

で、その佳祐はというと……

壁に追い詰められています。彰人さんに。合掌。

「あつ、妖あああ！！助けてえ！！く、食われるから！まじで！ちよ、なんでみんな手合わせてんの！？」

「大げさにやー、佳祐？……いったただきまーす！」

「イヤ、いただきますって今言ったよね！？大げさじゃなかったよね！？」

ギヤーという悲鳴をバツクに乱と昌士と淳哉の一言。

「……カオスだ。うん」「……」

？ ？ ？

「……やつと落ち着いた。ったく、彰人は何度も止めるって言われているんだからいい加減にしとけよなあ。フロアに入るアタシの身にもなれよ……」

「ごめんごめんだにやー、茜。ま、やめる気はないけど」

あれからおよそ三分程続いたカオス状態を女子達の食糧ちからを人質にする荒技で何とか抑え、いさめた茜と彰人の一幕。

茜と彰人にはいつものこと、という空気が目立つが、被害者にとつてはたまったもんじゃない。さらりとやめなさいといったあたり反省の色は見られない。

「……で、二人ほど欠けてるのはどういう理由なんや？」

阿呆なやり取りには参加していなかった巧が言い、全員がはじめてその事に頭をまわした。

「咲希のことだから、蓮でも探しに行ったんだろ。あいつの居場所わかるのは咲希だけだし」

「龍騎の言う通りだな。まあ、じきに戻ってくるだろ」

気楽に言い放った龍騎と佳祐。そしてその背後には……

「もう居るよ。ここに」

バツとみんなが見つめる先にいたのは、二人の少年と少女だった。

? ? ?

みんながバカ騒ぎしているころ、少女は一人、校庭をうろついていた。

理由は一つ。今日もこの場所のどこかにいるであろう男を昼食前によびだすためだ。

四百メートルトラックで体育の授業が終わり、教室に帰ろうとしている人達が自分を凝視しているのが解るのだが、少女はあくまでも無視する。

普段、姿を見ることさえ一週間に三日あればいい方の万屋委員のメンバーである上に、綺麗にまとめられたやや明るめの黒の髪で作ったポニーテールが、その女子にしては少し高めの百六十センチという背と相まって、太陽の光と空の青さに映え、本物の妖精に見えたとは、後にその場に居合わせた男子の一言。

少女はグラウンドの一番北西、学校のシンボルでもある世界でこれ一本しかないといわれているクリスタルブルーの葉をつける『謎の木』を指して歩く。

少女の歩調に迷いはない。それは、自分の探している人が必ずそこにいるという確信を持っているからだ。

『謎の木』のふもとに辿りついた少女がまっすぐ上を見上げる。すると案の定、そこにはアイマスクをして太い木の枝を背もたれにして眠る、目の覚めるような黒髪をした男がいた。男を起さないようにそうつと近づき、木に登り、男の耳元に丁度口が来る高さの別の枝から、少女は叫んだ。

「おつきろーーーーー」

「！！！！」

突然耳元でかい音がしたんだからたまらない。男は飛び起き、そのせいでバランスを崩し、十二メートル程の高さから下にまっさかさま。

しかし、男は慌てていた心を落ち着け、空中で宙返りし、見事な着地をして見せた。その時間、半秒もなし。

いまだに律儀に視界を閉ざしているアイマスクを取り払い、この世界の人ではあり得ない、紅い眼を瞬かせ彼はさつきとは真逆の位置関係で少女を見つめ、嘆息した。

「……はあ。なんだよ、咲希」

男に呼ばれて緋色^{ヒイロ・サキ} 咲希は要件を伝えた。

「おはよ、蓮くん。もう昼食だよ？」

咲希に呼ばれ、唯我^{ユイガ・レン} 蓮はさらに溜息を重ね、もつともだ、と誰も
が思ふ事を言った。

「だからって人を殺そうとするなよな……」

「いやあ、こんなことするつもりはなかったんだけどね」

無視して蓮はすたすたと校舎に向かって歩きだす。咲希はその後を
追って慌てて下に降り、駆け足で蓮の横に着く。

「まってよー、蓮君くん！！」

「……何？」

心底うざったそうに蓮は咲希を見る。そんな蓮の視線に負けず劣
らず視線を返し、咲希は答える。

「最近冷たいんだもん、蓮くん。私、何か余計なことしたっけな
ーと思って」

「……殺人未遂「わかった、謝るから。私が悪かったからもう言わ
ないで」……了解」

過ぎた事をいまだにぐちぐち言う蓮に微笑みをかけ、咲希は言っ
た。

それから、二分弱、二人は一切の会話をせずに校舎を目指す。

その過程で最初に沈黙の壁を破り、口を開いたのは蓮だった。

「……ごめん、最近疲れてたから」

「え？」

「だから、冷たいって……」

一瞬呆けたように蓮をみつめ、突然話しかけられた咲希は動揺で声が上ずっていた。そしてその後、トマトもかくやという位に頬を真っ赤に染め、咲希は言った。

「いや、結構冗談のつもりだったんだけど……」

「知ってる。こうやっていきなり話しかけると赤くなるくせをついた、さっきの仕返し」

もじもじと言った咲希にニヤリと蓮は笑い、それを理解するまでに数秒を要した咲希は、さらに真っ赤になってフン、と顔をそらす。バカにしているようで、すべてお見通しのつもりでいて、何一つ咲希の心の真実に近づけていないのが蓮の残念なポイントだ。

「機嫌直せよ。あとでなんかジュースおごってやつから」

「絶対？」

「ああ、絶対だ」

と、言ったら咲希は機嫌を直した。現金な奴だ、と蓮は思ったのだが、またも真実からは遠い考えなのだった。

それを判っている咲希は蓮に聞こえないようにボソッと呟いた。

「……このニブチン」

「ん？何か言ったか？」

「うっん、なんでもない。さ、もどろ。きっとみんな待ってるよ」

言って、咲希は駆け出して行った。はあ、とため息をついて蓮もそれに続く。

よく晴れたグラウンドの隅での出来事だった。

プレリユード〜前奏曲〜？（後書き）

疲れました。この程度の文章組み上げるのに一体どんなにかかっているんだってという話ですよねorz

プレリユード〜前奏曲〜？

突然あらわれた蓮と咲希に、いち早く反応したのは茜だった。

「今までどこに行ってたのよ、このバカチン！！」

ポカーン、といういいおとがして、蓮の頭が大きく揺れる。痛い、と呻いたあと、蓮は言った。

「痛いから叩かないでくれ．．．．．さっきだって殺されかけたんだから」

え．．．．．？というなんともいえない空気が流れるのと、殺しかけた本人が赤面するのはほぼ同時だった。

そして犯人が割れるのもまた然り。そしてなおさら赤くなるのだった。

閑話休題。

「さて、マイペース二人が見つかったことだし、飯食おうぜ。俺は腹ペコで死にそうだ」

佳祐の一言にもっともだ、ということとで皆で食事タイム突入。

目の前に展開されたハンバーガーとポテトにひたすらがつく男子と、それをあきれ半分、母性半分で見守る光景は世界共通か。

約15分後、無残に空っぽになったハンバーガーの箱とポテトの袋を一瞥し、龍騎は窓から青く高い空を見上げる。その様子に気付いた淳哉と巧が龍騎の隣にさりげなく近付く。

「．．．．．直人達とのこと、考えてるやろ？」

巧の言葉に、龍騎は微かに目を細めた。

「あいつが消えたのも、こんな晴れた日だったもんな。今でも僕は忘れられないよ」

淳哉がつないだ言葉に、しかし龍騎は反応しなかった。それでも、聞いてくれてるのはわかっていたので、淳哉は続ける。

「気負うなよ。あいつらのことだ、また『久しぶりだな』とか言つて帰ってくるよ」

そこで初めて龍騎は口を開いた。

「気負っちゃいないさ。でも、なんでだろうな。もう帰ってこないような気がするんだ」

「不吉なこと言っんやない。また、会えるに決まってるやろ!？」

声を荒らげた巧に、他の面々も注意を向けはじめる。しかし、誰一人として介入しようとはしない。横槍は厳禁、それが当然というのは暗黙の了解だった。

「巧、落ち着け。龍騎の気持ちなんて、わかっているだろう」

淳哉の抑制に、巧は我に帰ったようだった。

だが、それすらも龍騎は気にしていなかった。

「あいつは、ここじゃないどこか、別の世界にいると思う。根拠はないけど」

「天国ってこと？（はつきり言ってしまうと、そういうことでしょ）」

いつの間にか、背後に里香がいた。そのなんのオブラートに包んでいないその発言に、龍騎も笑みをこぼす。

「いや、そうじゃなくて、もっと別世界にいると思うんだ」

「魔物が闊歩するような？」

「とんでもないことをさらっというな・・・」

悠乃が当たり前のように言ったことに苦笑して茜が返す。そんなやり取りをきいて、皆笑った。明るく振る舞う影には、みな様に脳裏に行方の知れない友達を浮かべていた。

幽月 直人（ユウヅキ・ナオト）、慰為雫 貴之（イイダ・タカユキ）、華嶋 奈央（ハナジマ・ナオ）。三人は万屋委員の黎明期にいた人物だ。直人はカリスマ性溢れる、鋭い目付きの、リーダー気質の人物だ。

前委員長に元々不良だったのを全校生徒の前で喧嘩勝負に負け、忠誠を誓ったのが始まりで委員会に入った。元は不良だったこともあり、後輩や仲間を大事にする男気のあるやつだった。

貴之は陸上競技部長だった、ストリートヘアの可愛い顔立ちの男だ。誰とでもすぐ仲良くなれる明るい性格で、やたら青春していたのが印象に強い。とにかく、部活に恋に、勉強に、忙しい人だった。進研ゼミの申し子の称号をたまわったのは、誘中初だろう。

そして、奈央。彼女はまさに、件の前委員長だ。同級生ではあるが、

どこか凜としていて、格の違いを直感的に悟らせるオーラをまとっていた。異常に人脈が広く、全国の生徒会に太いパイプをもっているわ、暴力団では最上級の待遇は受けてるわ、警察に顔が利くわ、色々謎だ。

ちなみに現在のメンバー全員と何かしら絡みがあり、その人脈と、悠乃の集客力が合わさり、万屋委員が発足した。

天然のブロンドで、足まで着くんじゃないかと思うほどの長い髪だった。勿論、可愛さは最強。完全無欠だ。

そんな三人が、突然消え去ったのは、二年生になり、あらかた不良を更正させ終わった初夏のころ。

部活帰りに、龍騎とその三人で帰っていたのだが、突然、動きが固まり、辺りに蒼い光が満ちたと思ったら、次の瞬間には消えていたのだ。

勿論、徳川家のネットワークや、奈央の人脈を使い、あらゆる方面の人物に接触、搜索したが、ついに見つからなかった。

自分が別世界に行ったといっても、誰も笑わなかったのは、委員長ならやりかねないという考え方もあったし、世界規模で探したので居なければあとはそれしか考えられなかったのだ。——そして、俺は当事者として関わったにもかかわらず、あいつらを見つけられなかった。

龍騎にだってそれを悔いる必要性はないのはわかっている。だが、やはり、いまだに引きずる。

（いつそ、本当に別世界にいつてたら、生きてるだけましなんだけどなあ……）

そんな思考が頭をめぐる。そして、そんな自分に気付き、自分を嘲笑う。だが、龍騎は思った。

（そんな壁があっても、あいつらは俺が必ず見付ける。見つけ出して見せる！）

龍騎は、決意を改めて心に刻み付ける。

運命の時は、既に近かった。何かの手が、ゆらりと揺れる。

——かの世界へと誘うように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0702r/>

ギルティア戦記

2011年3月30日18時06分発行